平成 30 年度　エルムズ大学　長期留学報告書

高知県立大学　文化学部文化学科　4 回生　喜屋武ひかる

私は、2018 年 9 月から 2019 年 3 月までの半年間、アメリカのマサチューセッツ州、チコピーにあるエルムズ大学に留学しました。長年の夢であったアメリカでの留学に期待とそれ以上の不安がありながら、ブラッドリー国際空港に降り立ち、迎えに来てくれたエルムズ大学の学生と会話したことを覚えています。

9 月から始まる学校のオリエンテーションに参加するため、8 月末に渡米しました。そこでの入国審査で私は、別室に連れていかれました。その理由は、留学生が入国審査時に持っておかなければならない I-20 というビザをスーツケースに入れたまま入国審査を受けたからです。「お前の I-20 はどこにある」と無表情の男性職員から聞かれ、いくつかやり取りをした後、別室に連れていかれ、警備員さんとスーツケースを取り、「入国出来なかったらどうしよう」と心配しながらその中に入っている I-20 を見せ、なんとか入国できました。入国する際からこれからの半年間がさらに不安になる出来事を体験し、私の留学生活がスタートしました。この報告書では、留学を決意した動機、大学で特に印象に残っている授業のこと、そして、半年間での気づきについて述べたいと思います。

まず、私がエルムズ大学への留学を決意した理由について一つ述べたいと思います。私には、中学校の英語教師になりたいという夢があります。授業内で「英語」を教えるだけでなく、「英語」を通して、自国はもちろん、他国への興味を持ってもらえるようにしたいという思いがあります。そのためには、自分自身がまずは、外の世界を体験しなければいけないと考えていました。「百聞は一見に如かず」という諺があるように、先輩方から留学の話を聞き、それをそのまま生徒に伝えたとしても説得力がなく、興味を引くこともできないと思います。よって、自分の体験したことを自分の言葉で生徒に伝えることができるよう、国外で一定の期間生活しながら、自国と他国の様々な面における違いを知りたいと思っていたことがエルムズ大学への留学を決意した動機です。

次に、大学で特に印象に残っている授業のことについて述べます。まずは、私が受講した 9 つの授業について簡単に紹介します。秋学期に Academic ESL、Advanced ESL、First Year Seminar、Eastern Tradition、Stress and Coping の 5 つの授業を受講しました。Academic ESL は、アメリカの歴史、政治について学ぶ授業でした。Advanced ESL では、自然科学について学びました。First Year Seminar は、1 回生が必修の授業です。クラスが 8 つに分かれており、全てのクラスで同じ教科書を使用し、教科書の内容について、自分の体験をもとに授業内でディスカッションをしました。例えば、幼少期学校のミッショントリップでの出来事について話すというテーマがありました。アメリカの学生と日本の学生のバックグラウンドが大きく異なるので、友達の話している内容を理解することは簡単なことではありませんでした。同様に、私の経験も彼女たちにとっては知らないことなので、説明することが大変でしたが、図や写真を見せながら理解してもらえるよう努めました。Eastern Tradition は、

東洋の宗教について学ぶ授業でした。その授業では、日本の宗教についても学びました。しかし、日本の宗教についてほとんど何も知らず、初めて知ることも多くありました。また、私の地元の宗教観について話すと興味深く聞いてくれました。Stress and Coping の授業では、人間とストレスの関係性について学びました。春学期には、3 月末で帰国することもあり、5 つではなく 4 つの授業を受講しました。科目は、Academic ESL、Advanced ESL、Introduction to Philosophy、Cristian Scripture です。ESL の授業では、秋学期と同様の内容を取扱いました。Introduction to Philosophy は、高校の倫理の内容とほぼ同じでしたが、日本語で訳された人物名と英語での人物名が全く異なることもあり、それを覚えるのが大変でした。Cristian Scripture は、旧約聖書や新約聖書について学ぶ授業なので使われている英単語や内容がとても難しかったです。上記の 9 つの授業に加え、エルムズ大学で隔年開講されている日本語クラスのお手伝いもしました。日本語クラスの授業は、フルブライトで来られた日本人の先生が日本語を教える授業です。英語で多言語を教えるお手伝いや授業内での活動のサポートができたことは、私自身の勉強にもなったので、貴重な経験ができました。

これらの中で特に印象に残っている授業は、ESL です。ESL を受講しているすべての学生は英語が母語ではありません。そのため、アメリカの歴史や政治体制、英語でのエッセイの書き方を学びました。また、このクラスには、プエルトリコ、台湾、コートジボワール、タンザニア、ハイチ、ポーランド、レバノン、フランスなど、約 10 か国以上の国から学生が来ていました。そのため、それぞれの国の歴史や政治体制の特徴とアメリカの歴史や政治体制の特徴を比較しながら学びを深めることができました。この授業は、毎回のリーディングの宿題に加え、プレゼンテーションやエッセイ、学内への友達へのアンケートなど、課題の量が多く、苦労しました。しかし、友達や先生と授業に関係のない話や、友達の故郷についての話を聞いたりすることができるクラスだったので、毎回楽しみにしていました。また、英語でのプレゼンテーションを行うことやエッセイを書くことは簡単なことではなかったのですが、先生や友達からプレゼンの内容やエッセイについて良い評価をもらえた時は、努力が報われたと思い、達成感でいっぱいでした。時には、他の生徒と自分の英語力を比べ、焦りを覚えたり、落ち込むこともありましたが、そんな時は、先生や友達に相談しました。ESL の先生は、毎年エルムズ大学に学びに来る県立大学の学生に英語を教えていることもあり、留学生が抱く悩みに対して理解があり、適切な助言をしてくれました。毎回の授業でも積極的に発言することが苦手な学生の声を拾ったり、発言する機会を与えたりしており、ひとりひとりに目を向けて指導してくれたので、毎回安心して授業に臨むことができました。

次に、半年間での気づきについて述べたいと思います。大学での授業や、学外での活動を通し、考えさせられる出来事がたくさんありましたが、一番大きなことは、アメリカに住んでいるひとりひとりがアイデンティティを大切にしていることです。アメリカの歴史を学ぶ上で重要になることは、移民と人種差別の歴史だと思います。その歴史からアメリカには、アメリカ国外出身の人たちがたくさん住んでいます。私が出会ったすべての人は、自分の故

郷や宗教、文化、歴史、言語に誇りを持っていました。例えば、「私は、アメリカ人ではなく、プエルトリコ人だ」という自国に対する誇りを持つ友達や、「僕のお母さんはカナダ出身だが、アイルランドにルーツがある」といい自分のルーツを知り、アイルランド語に興味を持ち、それを副専攻にしている友達、「私のお父さんは、ドイツ人だから私もドイツ語を話せる」という自分のルーツとそれに関する言語に誇りを持っている友達がいました。エルムズ大学で学ぶ前の私は、アメリカに住んでいる人たちは皆「アメリカ人」と、ひとくくりにしていました。しかし、歴史的な背景からアメリカには人それぞれ違う考え方や表現方法があり、それらに対して互いに尊重していることがわかりました。アメリカへ来た当初は、大学のあるチコピー周辺や、マサチューセッツ州にポーリッシュカトリックチャーチや、ロシアンモスク、プエルトリコ人がたくさん住んでいる地域があることに対して、理由やそれらが存在する背景を深く考えていませんでした。しかし、ESL でのアメリカの歴史についての授業や、友達との会話を通して、それらの施設や地域はアメリカの歴史が深く関わっており、ひとりひとりのルーツが異なるため、自分のアイデンティティを大切にし、互いに尊敬していることがわかりました。私は、今まで「異文化理解」と聞くと、違う国同士の人とのやり取りから相手を理解することだと考えていました。しかし、半年間の留学を通して、国という大きな範囲だけではなく、たとえそれが同じ国の人同士であったとしても、ひとりひとりが持っている「文化」は同じではありません。そのため、個人を理解することが「異文化理解」だと気づきました。他人を理解することは容易なことではありません。相手のバックグラウンドをよく知り、常に敬意を表すべきだということをアメリカでより一層考えさせられました。卒業後、教師になった際、生徒のアイデンティティを尊重、伸長できる教師になろうと強く思いました。

最後に、この留学が実現するにあたり、たくさんの方のお力をお借りしました。私の夢のためなら、と高い学費を払ってくれた両親、最後まで留学が実現するためにサポートしてくださった先生方、エルムズでの生活がより良いものになるようにといつも助けてくれたエルムズの先生方や友達、教育実習先の母校、そして日本の友人たちには本当に感謝しています。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。